



学校法人  
鎌倉女子大学

## マレーシア国民大学への訪問

本学は、Universiti Kebangsaan Malaysia（マレーシア国民大学）との間で学術交流に関する覚書を締結しました。同大学は、1970年に設立されたマレーシアで3番目に古い国立大学で、国内外有数の研究大学として知られています。約2万人を超える学生が学び、人文社会科学から理工・医療分野まで幅広い学問領域を有しています。本覚書は、両大学間における教育・研究分野での連携を推進し、学生・教員の交流、学術活動の充実を図ることを目的とするものです。

今回の交流は、本学児童学部子ども心理学科の藤澤文教授の共同研究者である同大学の研究者が2024年に本学を訪問し、大学や併設校の授業を見学されたことを契機として、先方から学術交流に関する覚書締結の提案がなされ、その後の継続的な対話を通じて実現に至りました。大学間の連携は、形式的な協定だけで成立するものではなく、個々の教員同士の信頼関係の積み重ねの上に築かれるものであることを、今回あらためて実感いたしました。

本年3月に長岡暁夫教務部長、教育学部教育学科のDavid Chapman教授、そして、現地で在外研究中であった藤澤文教授とともにマレーシア国民大学を訪問し、覚書の締結式に出席しました。南国のやわらかな朝の光に包まれたキャンパスで、先方の副学長、教育学部長らの温かい歓迎を受け、大学内の荘厳なホールにおいて式典が執り行われました。両国の国歌および校歌の斉唱にはじまり、双方のスピーチの後に署名と記念品の交換が行われる、格式と温かさを併せ持つ印象的な式典でした。締結式後には、教育学部の教員や学生との意見交換の機会も得られ、日本の大学教育や学校現場への関心の高さを感じました。本年秋には、マレーシア国民大学教育学部の学生が本学を訪問する短期プログラムについても計画が進められています。異国の地にあっても、教員を志す学生同士の交流は、双方にとって視野の広がる貴重な機会となることでしょう。

マレーシアは、日本から飛行機で約7時間の距離にあり、人口は現在約3400万人、一人当たりGDPはおよそ1万2千ドル前後の水準にあります。東南アジアの中では、シンガポール、ブルネイに次いで高い経済発展段階に位置しており、昨年秋にはASEAN議長国として報道されていたことも記憶に新しいところです。首都クアラルンプールには高層ビルが立ち並び、夜空に煌々と伸びるペトロナスツインタワーと、2023年に竣工した世界で2番目に高いタワーのムルデカ118が都市の発展を象徴していました。

マレーシアの高等教育について長年研究を続けてこられた社会学者である吉野耕作氏は、著書『英語化するアジア』（名古屋大学出版会）の中で、マレー文明・中華文明・インド文

明などが混在する多民族社会の中で培われた、人々が状況に応じて複数の言語を柔軟に使い分ける「マレーシアならではの言語観」の存在に触れ、マレーシアの高等教育の国際化を支えていることを指摘しています。現地を訪れ、まさにその実態を強く印象づけられました。実際、マレーシアは日本人学生にとっても語学研修や留学先として人気が高まっており、今回の訪問の際にも、関西の大学から語学研修に訪れている学生や日本の高校を卒業した留学生の姿も見られ、話を伺う機会がありました。英語環境の中で多文化社会を体験できる点が大きな魅力となっているようでありました。

本訪問では、マレーシア国民大学のほかにも、サンウェイ大学、アジアパシフィック大学にも訪問し、今後の教育・研究連携につながる意見交換を行うことができました。いずれの大学においても、東アジア・国際社会の中で存在感のある大学へと発展させていこうとする強い意欲が感じられました。急速な経済成長とともに高等教育の国際化が進むマレーシアは、まさに躍動する東アジアの一翼を担う存在です。こうした大学との連携の機会を大切にしながら、本学の更なる教育研究の充実につなげていきたいと思えます。

(副学長 福井 文威)

[>前のページへ戻る](#)